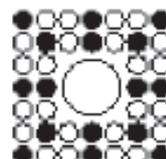


Newsletter of the British Council Japan Association

BCJA Newsletter

No.34

April, 2018



● お知らせ ●

奨学基金への寄付を募ります

BCJA 奨学基金は、BCJA 会員の有志の方々からの寄付金を基盤として、英国留学生の支援活動を着実に進めてきております。今年度も奨学生の募集を行いますので、奨学基金へのご寄付をお願い申し上げます。

(詳しくは、本ニューズレター12 ページをご覧ください。)

募金計画

- ◆ 寄付金額: 一口 5,000 円
 - ◆ 口座番号: 00180-0-426794 (ゆうちょ銀行)
 - ◆ 加入者名: BCJA 奨学基金
- 同封の振込用紙をご利用くださいませ。

年会費の納入をお願いします

BCJA 運営のため、年会費の納入をお願いいたします。

納入方法

- ◆ 年会費金額: 2,000 円
 - ◆ 口座番号: 00180-0-426794 (ゆうちょ銀行)
 - ◆ 加入者名: BCJA 奨学基金
- 同封の振込用紙をご利用くださいませ。

BCJA 役員および執行部を募集いたします!

BCJA の運営のためにご協力いただける方を随時募集しております。Google グループなどで活動も行っておりますので、是非ご連絡ください。

ご連絡先

- ◆ Google グループ URL
<https://groups.google.com/forum/?hl=ja#!forum/bcja-member>
- ◆ メールの方は: ishiikayoko@hotmail.com

2017 年 BCJA 年次総会について



BCJA 会長 青柳昌宏

2017 年の BCJA 総会については、昨年に引き続きまして西田先生のご厚意により根津美術館の講堂を使わせていただき、2017 年 11 月 18 日(土)に開催させていただくことができました。なお、総会の前後に、開催中のコレクション展「鑿の華-光村コレクションの刀装具-」(パンフレット参照)を鑑賞させていただくことができました。また、懇親会は、場所を変えて開催させていただきました。以下が議事の内容になります。

◆BCJA 総会 (15:30-15:50)

(1) 会長報告と審議

17年目を迎えたBCJA奨学金は、例年レベルの応募数があり、優秀な奨学生4名(5名選考、1名辞退)を英国留学に送り出しました。一方、BCJA 会員の高齢化により会員数が減少しているため、奨学金への寄付総額は、徐々に減少する傾向にあり、奨学金の運営を維持するためには、BCJA 奨学生に対する会員登録への積極的な勧誘および役員会への参加勧誘などを検討する必要があります。一方、奨学生独自の OB 組織の準備について、有志により定期的会合が開かれており、さらなる活動の活発化を期待したい。その他、BCJA および奨学金が抱える課題(会員増加策、奨学基金増強のアクションプラン、奨学基金の NPO 法人化など)について、議論を行った。

(2) BCJA 奨学金報告: ニューズレター34号参照

(3) 会計報告と承認: ニューズレター34号参照

(4) ニューズレター・ホームページ報告: ニューズレター34号参照

(5) 新役員および新執行部の選出

会長：青柳昌宏
 会計：島津幸男
 講演会および AGM 担当：西田宏子、山口晶子
 ニュースレター担当：石井加代子
 BCJA スカラー担当：斉木臣二
 役員：白鳥令、青柳昌宏、平正臣、池島大策、出来尾格
 (敬称略)

の方々が前年に引き続き承認されました。

◆美術館見学(16:00-17:00)

◆懇親会 (17:00ー)

(総会についてのお問い合わせは、
 masa_aoyagi5@yahoo.co.jp までお願いいたします。)

2017 年度BCJA英国留学奨学金の審査を終えて

——募金へのご協力に対する感謝とお願い

BCJA 英国留学奨学金審査委員会 委員長 白鳥 令

2017 年度も、別表の通り、無事 5 名の非常に優秀な研究者の方々に BCJA 英国留学奨学金を差し上げることになりました。この奨学金のために寄付をいただきました皆様 (BCJA 会員およびご賛同者) に、心から感謝申し上げます。

BCJA 英国留学奨学金がスタートしたのは 2001 年です。今回の授与でこの奨学金は 17 年間続いたことになり、今回の授与者も含めて、BCJA 英国留学奨学金の授与者総数は 127 名となります。現在の審査委員会の委員の一人は、2005 年度の奨学金受領者で、ケンブリッジ大学に留学された方です。こうして見ますと、時の流れの速いを感じると共に、この奨学金制度を支えて下さった BCJA 会員の皆様の温情に、頭の下がる思いです。

BCJA (British Council Japan Association) は、その発足時には、英国政府外務省文化部の位置付けであった British Council が運営していた「British Council Scholarship」(英国政府奨学金)を受領して英国の教育研究機関に留学した人々を主たる会員とした親睦団体だったのですが、1990 年代になり、日本は富裕先進国だと英国政府が判断して British Council Scholarship の適用国から日本を除外する決定を行ったのを契機に組織を改革し、会員 資格を英国に留学した経験のあるすべての人々に拡大・開放すると同時に、日英間の学術交流を維持・促進する目的で、BCJA 会員からの寄付による英国留学のための奨学金を 2000 年に創設、2001 年から運用を開始したのです。

この豊かな時代に、また日英大学間の学術交流が盛んな時代に、「わずか 15 万円の奨学金で何が出来るか」と言う批判のあることも確かです。しかし、日本の教育研究環境はまだ貧しく、大学の研究費は減額傾向にあり、オーバードクターや非常勤の講師・ 研究員は増加の現実があり、特に人

文社会科学や音楽芸術系では研究滞在や留学の機会が多いとは決して言える状況ではありません。本年も、この奨学金に 56 名の非常に優秀な研究者・学生の応募があった事実が、この奨学金の必要性を示して 居ます。

私共は、選考に際して、特に留学資金の援助を得る機会の少ない人文科学や芸術の分野にも留意するようにしています。本年度も、非常に優秀な歴史学分野の研究者が居たのですが、残念ながら僅差で選考されませんでした。この奨学金の受領者の多くが、「この評価の高い奨学金を受領出来たことを名誉だと思い、その後の大きな励みとなった」との感想を述べています。審査員一同は、BCJA 英国留学奨学金を「出来るだけ評価の高い奨学金にしよう」との姿勢で審査して居ます。「金銭的には 15 万円で少額であっても、それを費うことが名誉であり、その後の励みとなり、その後のキャリアに役立つ」、そんな奨学金にしたいのです。オクスフォードやケンブリッジでは、今でも講義に出る時やカレッジでの夕食の際に学生はガウンを着ますが、大学の認める奨学金の受領者のみが長い袖のガウンを着ることを許されません。奨学金は金銭的な扶助であると同時に、名誉の象徴なのです。だから、「金持ちの貴族は奨学金に応募し、長い袖のガウンは着るのですが、お金自体は受け取らないことがある」と何年か前にこの欄で書きました。この BCJA 英国留学奨学金でも、昨年、奨学金受領者の一人が「奨学金は受け取らないが、奨学金受領者の名簿にはそのままとどまりたい」との希望を述べ、承認されました。英国の大学や研究機関で、BCJA 英国留学奨学金の授与歴を、他の奨学金を与える際の参考としている例が聞こえて来ているのは、嬉しい限りです。

今回の奨学金受領者の名簿を確定する際に、BCJA 会計の島津幸男 (山口県在住) さんが、「今後ともこの素晴らしい奨学金制度の存続に向け、ご一緒にいろいろ知恵を出してまいりましょう」とメールに書いて下さいました。BCJA 会員の皆様、どうか日英間の学術交流を支えるために、また団体としての BCJA の存在価値を未来に向かって高めるために、BCJA 英国留学奨学金に対し皆様のご厚情をいただきたく、お願い申し上げます。

BCJA 英国留学奨学金の寄付の方法

- ◆ 寄付金額： 一口 5,000 円
- ◆ 口座番号： 00180-0-426794 (ゆうちょ銀行)
- ◆ 加入者名： BCJA 奨学基金

2017 年度奨学金授与者リスト

氏名	出身校/所属	留学先	分野
齊藤 真	東京大学医学部、London School of Hygiene & Tropical Medicine	University of Oxford, Nuffield Department of Medicine	感染症、疫学

遠藤 彰	東京大学医学部、北海道大学大学院医学研究科	London School of Hygiene & Tropical Medicine	感染症数理モデル、理論疫学
田中 良法	山口大学農学部、東京大学大学院農学生命科学研究科	University of Cambridge, Cambridge Institute for Medical Research	分子神経病理学、細胞生物学
角南 慎一	京都大学理学部	University of Oxford, Department of Physics	物理学 (Atomic and Laser Physics)
松原 陸	東京芸術大学音楽学部	Royal Academy of Music (Master of Arts)	音楽学 (音楽専攻オペラ研究)

留学先の変更(英国以外)により1名ご辞退されたため、計5名の方に奨学金を授与いたしました。

2001年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

留学レポート

山尾佐智子(旧姓:南谷)

2001年度にBCJAから奨学金を頂き、UMIST 経営スクールに留学いたしました。2004年のUMISTとVictoria University of Manchesterとの合併により、留学先は現在Alliance Manchester Business Schoolと呼ばれております。留学中は国際ビジネス修士コースに在籍いたしました。奨学金は、ある日系電器メーカーの海外子会社における人材育成システムをテーマとした修士論文の、調査費用に充てさせて頂きました。これは日本、シンガポール、マレーシアにまたがる国際調査となり、当時マンチェスターから一時帰国して、シンガポール、マレーシアに一時滞在ののち、マンチェスターに戻ったのをよく覚えております。ちょうど2002年のFIFAワールドカップ日韓大会と時期が重なり、各地で試合を見ることとなりました。

この修士論文を書く作業は大変辛かったのですが、同時に調査や研究内容を書き上げる際の充実感など、研究の楽しみも大いに見い出しました。また、多文化環境に身を置くことで視野を広げ、日本を外から見ることの大切さも学んだ一年でした。そのような貴重な経験を得たことから、修了後も再度PhD留学を志すこととなり、紆余曲折の末、2004年3月から2008年12月までオーストラリア、メルボルンにあるモナッシュ大学でPhD(経営学)を修めました。また、2009年2月から2017年3月までメルボルン大学で国際経営論、国際人的資源管理論のテニュア教員として、研究・教育に勤しみました。10有余年を過ごしたオーストラリアから再度イギリスへ移住することを真剣に検討していた折、縁あって2017年に帰国することになり、現在は慶應義塾大学大学院経営管

理研究科で教鞭をとっております。

帰国してちょうど1年がたち、現職にも20年ぶりとなる東京生活にも慣れてきました。日本を離れた2000年代初め頃とは異なり、グローバル人材やダイバーシティなどの言葉も当たり前のように見受けられます。マンチェスター以来の研究・教育のテーマである、多国籍企業や海外進出企業の人材マネジメントを引き続き追求し、今後もMBA教育や社会人セミナーなどに役立てて参りたいです。BCJAの奨学金は、研究者として今に至る道のりの、大切な出発点となる調査を可能にして下さいました。貴重な機会を頂いたことに心より感謝申し上げます、貴会のますますのご発展を祈念いたします。

(2001年度 BCJA 奨学生、University of Manchester)

2002年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

留学報告

迫桂

私は2002年にBCJA奨学金を受けたのですが、諸事情により留学開始時期と留学先を変更し、2003年9月からウォリック大学英語比較文学科博士課程に留学をしました。大学名から、ウォリックにあると誤解されることが多いのですが、実際は、コベントリーという地方都市の中心部からバスで30-40分のところにあります。ここはWest Midlandsと呼ばれる地方で、中心にあるのが大都市バーミンガムです。コベントリーは第二次世界戦争中の爆撃で都市中心部のほとんどが崩壊し、戦後になって再建されたため、歴史的景観という点では、他の多くの都市にあるような風光明媚な印象は与えません。ですが私の留学中にコベントリー大聖堂が一部再建され、そこで開かれた屋外コンサートに出席したことを今でも覚えています。また、大学から南にいくと、コッツウォルズ地方に近くなり、野原が広がる風光明媚な地帯になります。

留学の1年目と3年目はキャンパスの寮に住みましたが、キャンパスは良くも悪くも孤立した環境でした。周囲にはパブが数件、大手スーパーのTescoの大型店他の店舗が入った商業施設が一つあるくらいでした。その代わり、キャンパス内には、銀行の支店、大小の劇場、映画上映施設、スポーツセンター、ヘルスセンターなどがあり、キャンパス内で日常生活が成り立つ環境でもありました。東京暮らしが長く大都市の便利さに慣れていたため、当初は戸惑いましたが、友人と気軽に会うことができ、構内で開催されるセミナーや講演会にも行きやすかった点では恵まれていました。英語比較文学科の博士課程の同級生も、ほとんどがキャンパスの寮に暮らしていたため、頻繁に会うことができました。この時に得られた交友関係はその後の研究活動や個人生活でも大きな支えになっています。

ウォリック大学の英語比較文学科は、大学院留学生も多く、

アカデミック・スタッフには各分野で確立した著名な研究者から、新進気鋭の研究者までおり、大変知的刺激に恵まれた環境でした。スタッフと大学院生の距離も近く、私の指導教官であった Dr Gill Frith も、きめ細かな研究指導をして下さっただけでなく、経済的なことから卒業後の就職のことまで、留学生活全般を気にかけて下さり、大変お世話になりました。博士論文では A. S. Byatt という女性作家の作品を研究しました。英文学者として大学に勤務した経歴もある彼女は、20世紀後半以降の文学批評理論(特に言語理論)に精通し、文学批評の理論化に創作面でも影響を受け一方、批判的でもある作家です。論文では、この文脈を踏まえて、Byatt の小説、短編、エッセイ作品、文学論的な著作を読み、それらが人間の経験、言語、現象世界のつながりの可能性をどのように模索し、描いているかを考察しました。

研究に加え、在学中は学部生を対象としたティーチングをすることもできました。また、留学中は、BCJA 奨学金のほかに、学費の一部補助を受けましたが、それで賄えない費用は自分で工面する必要があり、大学内のいろいろな部署でアルバイトを行いました。研究の時間は減ってしまったものの、これにより、学生の学習と生活を支える多くの人の存在を知り、学生としての視点を超えて、大学の運営組織面を認識する契機となりました。2008 年春の留学終了時、留学を振り返って強く感じたのは、無数の人に助けられたということでした。大学のアルバイトで知り合った女性がクリスマス・ディナーに招待してくれたこと、学生部の受付で夜間にアルバイトをしていた時、毎回出会うクリーナーの女性とよくおしゃべりしたこと、その人がある日ポケットからリンゴを出してくれたこと、そのアルバイトから帰宅途中のバスで乗り合わせた女性と何気ないおしゃべりしたこと、これらのちょっとした出会いが留学中の心細さや孤独感を癒してくれて有難かったことを今でも思い出します。研究生活以外で得られたこれらの経験は、その後日本での職業生活で大変貴重なものになりました。BCJA 奨学金のおかげで、有意義な留学生活を送ることができました。改めてお礼申し上げます。どうもありがとうございました。

(2002 年度 BCJA 奨学生、University of Warwick)

2010 年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

イギリス留学の報告と御礼

菅原健志

1. はじめに

2010 年度 BCJA 奨学金を頂きました菅原健志と申します。奨学金を頂いた時、私はイースト・アングリア大学 (University of East Anglia) の歴史学部博士課程に所属しておりました。研究分野はイギリス外交史で、紆余曲折はありましたが、2015 年に何とか修了することができました。現在は日本に帰国し留学で学んだことを生かしながら、研究を続け

ております。遅くなってしまいましたが、この場を借りまして留学中の状況および帰国後の活動について報告するとともに、BCJA の皆様に厚く御礼申し上げたいと思います。

2. イースト・アングリア大学での研究について

イースト・アングリア大学はイギリス北東部のノリッジ (Norwich) という都市にある総合大学です。日本人学生には開発学でよく知られており、実際イースト・アングリア大学で出会った日本人学生の多くが開発学を学んでいました。開発学とは全く縁のなかった私がイースト・アングリア大学への留学を決めたのは、歴史学部にも多くの外交史の研究者、特に私の研究テーマに不可欠な第一次世界大戦以前のイギリス外交史を研究する外交史家が在籍していたからでした。

私の研究テーマは 1902 年から 1923 年まで日本とイギリスの間で結ばれていた日英同盟に対するイギリスの外交政策を、イギリス帝国の防衛という観点から再検証するというものです。当時のイギリス帝国はまさに世界に広がる大帝国でしたが、激しい国家間競争により国際秩序が流動化していく中で、いかにして帝国を守っていくかが重要な課題となっていました。日英同盟に対するイギリスの外交政策も、そのような問題意識が反映されて、ヨーロッパ、中東、インド、東アジア、アメリカと様々な地域の利害が交差する非常にグローバルなものとなりましたが、これまでの研究は日英同盟を東アジアにおける日本とイギリスの関係から理解しようとする傾向がありました。私はイギリスの政治家や外交官の中で、特に日英同盟のほぼ全期間にわたってイギリス政府の中核で外交政策の決定に重要な役割を果たしたアーサー・バルフォア (Arthur Balfour) に着目し、彼を中心に展開されたグローバルなイギリス外交の中に日英同盟を位置づけることを目指しました。そのような狙いに基づいて書き上げたのが博士論文 'A Matter of Imperial Defence: Arthur Balfour and the Anglo-Japanese Alliance, 1894-1923' になります。

外交史の研究においては、研究対象の時代に書かれた史料が不可欠です。私の場合ですと、バルフォアを始めとするイギリスの政策決定者の手紙や覚書、さらには内閣の閣議や議会での発言を記した議事録などが、博士論文での議論の根拠となるので大変重要になってきます。イギリスはこれらの史料の保存状況がとても良いので、歴史の研究者にとってはありがたい限りですが、大量の史料を読みこなすのは一筋縄ではいきません。何より困ったのが政治家達の字の汚さです。バルフォアの手書きの文書を初めて目にした時は、これ本当に読めるのかと絶望的な気分になりました。幸い秘書が清書した文書と一緒に残されていることが時々あり、両者を突き合わせながら読んでいくことで少しずつですが直筆の文書も読めるようになっていきました。

さらに論文執筆の際にいつでも確認できるよう、読んだ史料を手元に置いておく必要があります。史料は貴重品であり、図書館や図書館に保管されているため当然外に持ち出すことはできません。近年はデジタルカメラやスマートフォンのカ

メラの使用が許可されるようになり、史料を写真撮影してデータをパソコンなどに保管するようになりました。しかしカメラの使用を認めない図書館や文書館もまだまだありまして、そのような時はノートパソコンを持ち込んで、ひたすら文書を書き写すこととなります。バルフォアの文書は写真撮影ができなかったので、読めた内容を即座にノートパソコンで記録するというのを延々と繰り返していました。

博士論文を書くためには様々な史料が必要になるので、このような史料収集をイギリス各地で行うことになりました。主たる調査はバルフォアの文書を管理している大英図書館と、イギリス政府の公文書が保管されている国立公文書館で行いましたので、双方の所在地であるロンドンによく滞在しました。またロンドン以外でも、オックスフォード大学やケンブリッジ大学の図書館、スコットランドのエディンバラにあるスコットランド国立公文書館などを訪問して史料収集を行いました。時には現在も続く貴族の邸宅に伺って、保管されている史料を読ませてもらったこともありました。(写真①)

こうして集めた史料をもとに論文を書いていったのですが、指導教官のトマス・オッティ (Thomas Otte) 教授に書き上げた草稿を見せると、厳しいコメントとともに真っ赤になって返ってきます。今から考えるとそのような指導がなければ、私の論文は到底博士論文とみなしうるレベルに到達できなかったと思います。自身の研究・講義・校務などで忙しいなか、ここまで丁寧に指導してくださったオッティ先生には足を向けて寝られません。ただ論文を書いていた当時の私には、そのように思う精神的余裕がなかったので、こんな調子で本当に博士論文が完成するのだろうかと何度も不安に襲われました。まさに「三步進んで二歩下がる」という言葉通りの進捗状況でしたので、博士論文を書き上げ、口頭試問を切り抜けて、製本版を提出した際には、ただただホッとしたことをよく覚えています。

3. イギリスでの生活について

イースト・アングリア大学はノリッジという地方都市にあります。バルフォアの文書はロンドンの大英図書館に保管されています。そのため私はノリッジとロンドンの双方に滞在することになりました。ノリッジはやはり田舎でして、良くも悪くも牧歌的でした。学部生のような若い学生にとっては物足りないかもしれませんが、治安が良く家賃や交通費も安くて、勉強や研究に集中するには良かったと思います。一方ロンドンには本当に多様で、まさに「世界中からヒト・モノ・カネが集まる」大都市でした。他の地方都市を訪れた際にも思ったのですが、ロンドンは単に規模が大きいとか人口が多いというのではなく、イギリスの他の都市と全く異質な存在になっているように感じました。全然意図していなかったのですが、結果的にノリッジとロンドンの両方で研究することで、イギリスの良く言えば多面的な、悪く言えば断絶している姿を実感できたことは幸運だったと思います。

イギリスでの生活で私が最も驚かされたのは、鉄道でした。特に私がロンドンで研究する時はいつもロンドン南部の郊外

に滞在していたのですが、このロンドン南部の鉄道は私の常識を次々と覆してくれました。まず5分や10分程度の遅れは珍しくないで、時刻表が単なる目安程度の意味しかありません。従って電光掲示板が写真②のようになることが日常茶飯事です。また事前通知なくいきなり電車がキャンセルされます。駅のプラットホームに行ったら、電光掲示板が写真③のようになっていて、乗る予定だった電車が来ないまま次の電車を待つということがしばしば起こります。一時期は更に拍車がかかって、「半年以上、毎月ストライキが決行されている」とか、「ストライキで南部の鉄道が火・水・金曜日の3日間完全に休む(これは一日2000本以上の電車が1車両たりとも動かないということを意味します)」などという事態まで発生しました。さすがにこの状況は異常だということで、緊急テレビ討論番組まで放送され、政府の介入が求められるようになりましたが、政府、鉄道会社、労働組合それぞれの主張が対立し、なかなか解決の目処が立たない状況です。以前は電車が時刻表通りに運行されることを当然のことに思っていました。それがいかに大変なことかということを経験して来たら痛感しました。

4. 今後の活動について

イースト・アングリア大学での博士課程を修了した後、日本に帰国することになりました。帰国後1年間は縁あって神戸大学国際協力研究科で学術研究員として勤務し、現在は日本学術振興会の特別研究員として京都大学法学研究科で研究に従事しています。またロンドン・スクール・オブ・エコノミクス (London School of Economics and Political Science, LSE) の国際関係史学部で、客員研究員として再びロンドンを拠点に研究を行う機会も得ることができました。今のところ博士論文の出版に向けて準備しつつ、研究テーマをさらに1920年代から1930年代へと広げていくことを考えています。国家間競争の激化と国際秩序の動揺にイギリスをはじめとした各国がどのように対処したか過去の歴史を研究することで、国際秩序が大きく変容しつつある現在の世界について考えるヒントが得られればと願っています。

5. おわりに

BCJA 奨学金を頂いた頃、私はまだ史料収集が終わっておらず、本当に自分が博士論文を書けるのか不安で一杯でした。BCJA 奨学生に選ばれた際に何より嬉しかったのは、完成する見込みがまだなく、今後どうなるかわからない私の研究を高く評価してもらえたことでした。その喜びが支えとなって前を向いて研究を続けることができたのだと思います。BCJA の皆様には改めまして厚く御礼申し上げます。BCJA の活動に微力ではありますが少しでも貢献できるよう精進するとともに、今後も BCJA 奨学金がイギリスで学ぶ留学生の支えとなることを心から祈念しております。

(2010年度 BCJA 奨学生、University of East Anglia)

2016年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

議会制度の母国で学ぶ

森上 翔太

私は、2016年9月から2017年8月までの1年間、法学部客員研究員兼クレア・ホール客員フェローとして、ケンブリッジ大学に留学をさせていただきました。まずは、私を奨学生として選んでくださったBCJAの皆様に対し、心より御礼申し上げます。

この度の私の留学の目的は、これまで自分が国会職員として携わってきたような仕事が、「議会制度の母国」と呼ばれる英国においてどのように行われているのかを調査することでした。すなわち、議員が自らの政策を法案(議員立法)の形にして議会に提出しようとする場合、その政策に関して綿密な調査・検討を行った上で、最終的には条文の体裁を整える必要がありますが、私は、衆議院法制局の職員として、国会議員からの依頼を受けて、そうした議員の立法活動を補佐する仕事に携わってきました。

他方、英国議会にも議員立法(Private Members' Bills)の制度自体は存在するものの、その裏で、誰が、どのようにしてその立案をサポートしているのかについて調査した研究はほとんどありませんでした。そこで、私は、ロンドンのウェストミンスターにある英国議会を何度も訪れ、議員や議会事務局の担当者に聞き取り調査を行うとともに、権限委譲を受けた地域(スコットランド・ウェールズ・北アイルランド)の議会を訪れ、それぞれの議会事務局の担当者からも話を伺いました。

その結果明らかになったのは、議員立法の制度(いつ、誰が、どのような手続で法案を提出できるかなど)が議会によって大きく異なっており、そのため、議員立法の補佐の在り方にも様々なバリエーションがあるということでした。そうした実務に触れることで、これまで「当たり前」だと思っていたことが実は当たり前ではなかったということを知り、大変興味深かったです。

以上のような実務的な調査のほか、私が所属した法学部では、デイヴィッド・フェルドマン教授による「立法学」という演習を聴講しながら、法哲学、英国憲法、立法過程の比較など理論的な勉強をさせていただきました。

また、デイヴィッド・コーブ教授のご紹介で所属させていただいたクレア・ホールというカレッジでは、ボート部にも加わり、年に一度のビッグ・イベントであるメイ・バンクス(May Bumps)に出場するなど、充実した日々を過ごすことができました。

「授与されるのが名誉と感じるような奨学金を目指している」との白鳥委員長のお言葉どおり、私は、BCJA 奨学生として選考していただけたことを大変名誉なことだと感じております。とりわけ、研究者としての経歴のない私のような実務家の研究に果たして価値があるのかどうか全く自信が持てず

にいたところ、渡英の直前に BCJA 奨学生として選考していただけたことは、大きな励みになりました。

さらに、同じ時期に BCJA 奨学生としてケンブリッジ大学に留学をされていた柳田絢加さんにも現地でお会いすることができ、交流の幅が広がったことも、かけがえのない財産になりました。

末筆ながら、これから先も、様々な分野において、BCJA 奨学生が活躍されることを願っております。

(2016年度 BCJA 奨学生 University of Cambridge)

2016年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

留学レポート

齋藤(梶原)麻里

2016年度 BCJA 奨学生の齋藤(梶原)麻里と申します。初めに、このような名誉ある奨学生に選考頂き、この場をお借りしてお礼申し上げます。私は現在 London School of Hygiene and Tropical Medicine (LSHTM) の Cancer Survival Group に博士課程学生として所属しています。留学前は外科医(主に消化器外科)としてがん診療に携わってきました。LSHTM の MSc Public Health(公衆衛生修士)にて医療経済学を専攻し、修士課程で学んだ経済学や統計学を発展させ、現在はがんの疫学を研究しています。

研究内容

がん患者の社会経済的地位(socioeconomic status: SES)による生存率格差のメカニズムの研究をしています。SES の異なる患者によってがん診療(治療を受ける病院、治療内容)に差があるのか、もし差があるのならどの程度生存率格差に寄与しているのかを研究しています。イギリスでは90年代よりSES間で著明な健康格差が報告されており、格差の研究は盛んに行われています。対して日本(大阪府)においてもがん生存率格差があることが示されており、そのメカニズムの追及、がん診療の均質化や格差対策が議論の対象になっています。

イギリスと日本は Universal Health Coverage (国民皆保険制度)を有する国という意味では共通していますが、医療システムは異なります(例として、General Practitioner による gatekeeping 機能が強制されているイギリスに対し、日本では gatekeeping 機能は非常に弱く強制ではありません)。それぞれの国の医療システム、がん診療がどのような過程で行われているかを理解した上で、イギリスと日本(大阪府)のがん登録データ等を用い、各制度下でSESによるがん生存率格差がどのようにして生まれるのか、それをもとにがん診療の改善点を考察していく予定です。

大学と学生生活

私の所属する Cancer Survival Group には生粋のイギリス

人は一人もいません。フランスやイタリアなどのヨーロッパ諸国出身者が多く、中東、南米からの研究者もいます。多様性を認めるロンドンらしいグループといえばそうなのかもしれません。学生も含めると約 30 人所属していますが、殆どが統計学者です。

LSHTM では博士課程の学生達に学生専用の部屋が与えられています。4 人部屋で、必ずしも毎日登校する必要はありませんが、最終学年の人達は毎晩遅くまで論文執筆をしていました。修士課程と異なり、博士課程には授業がなく自主性が重んじられているため、最初の一年はなかなかペースがつかめませんでした。しかし学生専用の部屋で気軽に相談できる人が身近におり、先輩学生達の経験談はとても参考になりました。

日常生活

LSHTM は大英博物館から歩いて 5 分もかからない場所にあるため、研究に煮詰まったときはふらっと 30 分程度博物館に立ち寄って気分転換をすることがあります。そのほか、バレエ鑑賞を Royal Opera House で時折楽しむこともあります。Covent Garden にある Royal Opera House は学校から徒歩可能な上、日本では考えられないほど安いチケット(10 ポンドから)が直前でも取ることが出来ます。世界的に優れた文化や芸術が身近にある環境の中勉学に励むことができ、大変恵まれていると感じます。

最後に

まだ博士課程の途中であり、研究者としては駆け出し前の段階ではありますが、家族の支え、そして大変名誉ある BCJA 奨学生に選んで頂き御支援をいただいたことが何より励みになっています。BCJA の皆様方に深く感謝申し上げるとともに、今後がん診療に携わる医師として、またイギリスで公衆衛生学を学んだ経験を活かし、がん診療の質の向上に携わっていきたいと思っています。

(2016 年度 BCJA 奨学生, London School of Hygiene and Tropical Medicine)

2016 年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

ロンドン大学留学体験記

佐村 淳知

はじめに

私は、2016年9月から1年間、ロンドン大学衛生熱帯医学大学院 (London School of Hygiene & Tropical Medicine; LSHTM) で MSc Public Health に在籍し、今は日本に一時帰国して、2018年春から Junior Professional Officer (JPO) として世界保健機関 (WHO) のモーリシャス事務所に赴任する準備をしています。

はじめに、奨学生として選んでいただいたことを BCJA の

会員様に感謝申し上げます。金銭面で役立てさせていただいてだけでなく、留学の志望動機や将来の展望について第三者から一定のご評価をいただけたことは大きな自信につながりました。

まったく新たな環境で、学業、妻子のある家庭生活、キャリアアップのための就職活動を同時に行ない、幸運にもいずれも成果を得ることができたことは、家族や友人、そして BCJA の皆様をはじめ直接・間接的にご支援くださった方のおかげと存じます。

研究内容

8年間日本の医療現場に従事して、医療介護サービスのプロバイダーとして Human Resources for Health に深く関わる中で、公衆衛生、とくに Health Services について学びたいと考えロンドン大学に留学しました。

1学期(9~12月)は、基礎的な必須モジュール4つを含めた計6つを受講しながら公衆衛生の基本を学びました。医学生時代とは違い、表面的でない突き詰めた理解を要求され、表現一つにおいても細かく指導され、これまでいかに漠然とした理解でごまかしてきたのかを痛感しました。すべてのレクチャーはグループワークと対になっており、ディスカッションを通して理解を深め、諸外国から集まったクラスメートたちと経験を共有することができました。保健制度や医療現場は国や地方によって大きく実情が異なることから、クラスメートの経験は重要な学習リソースでした。

2学期以降(1~5月)は5つの専攻に分かれて推奨や必須となっているモジュールを選択し(計5つ)、自身の関心に合わせて幅広く知識をつけることができました。私は Health Services Research Stream を選択し、独学が難しいと感じていた医療経済学、モデリング、医療政策分析を学びつつ、将来の研究や実務の必須スキルと考えていた Literature Review や Proposal Development といったモジュールを受講しました。医療専門職のへき地での retention をテーマとして文献を渉猟し、英米でアカデミックな文章に求められる条件を満たすように表現する訓練になりました。残念ながら、当初予定していたフィールドワークは現地で生じた自然災害のためにデータ収集が不可能になったものの、それまでのモジュールでの成果を元に、高度にシステム化された Cochrane Review の手法を用いて Literature Review での修士論文を9月に提出し、無事修士号をいただくことができました。

また、6月中旬には1学期のモジュールの筆記試験があり、膨大な内容を復習するなかで、2・3学期の理解が進みました。ところで、試験当日未明に発生したロンドン西部の高層アパート火災で多数の犠牲者が出たことは、公衆衛生行政に熱心な英国においても健康格差の凄惨な現実があることを突きつけられた事件でした。

生活一般

私は妻と当時3歳の息子、1歳の娘とロンドン大学の学生寮 (International Hall)の家族向けフラットで暮らしました。当

初は、スーパーで買いたいものを見つけるのも一苦労で、初めての英語圏での生活に四苦八苦し、勉学と家族生活の両立に苦しんで焦りのために勉強時間をいたずらに増やす時期もありました。しかし、息子が英語を一言も話せないにもかかわらず保育園に通って先生や友達を楽しく生活している姿や、妻や娘が幼児向けのアクティビティや学生寮の環境を生かして交友関係を広げ、生活を満喫している様子を見て、家族が幸せに暮らしていることこそが一番大事だと広い視点に立つことができ、それからは家族みんなでロンドン生活を満喫できました。

学期中の平日は、朝8時前に起床し、9時過ぎに息子を保育園に届けて先生とお話しし、その足で9時半からの授業に参加しました。夕方は5時から6時に頼まれたお使いをしながら帰宅し、家族で夕飯をとって BBC の教育番組が終わる7時に子どもたちを風呂に入れ、団欒をしてから9時に寝かしつけました。その後10時頃から午前1時すぎまで大学のPC ラボで勉強し、2時頃に就寝していました。一見夜更かしですが、1日の始まりが遅く、6時間の睡眠が確保できました。

学生寮は Russell Square 至近で、大学まで徒歩10分、保育園まで数分、スーパーまでも5分と非常に便利なところがあり、ベビーカーでもバスを使って市内各所に行くことができました。また、子育てにとっても適した環境で、緑豊かな公園と遊具や Fun Fair のようなイベント、チャリティーによるアクティビティ、少しお節介ながら注意を払ってくれる地元の方に恵まれました。生活した地区では総じて小さな子どもへの理解があり、子どもがぐずった時でも周囲の対応で嫌な思いをすることはありませんでした。

大学の現状

コースマテリアルはすべてウェブで管理されていました。資料の配信やエッセイの提出、質問の投稿、受講できなかったレクチャーの録音や聴講したいモジュールの資料まで手に入りました。またリモートを使用して学内で提供されるアプリケーションや個人アカウントのファイルへのアクセスができる点で、セキュリティに配慮しつつ場所を選ばずに勉強できる環境が整備されていました。

授業以外にも、毎日何かしらのセミナーやレクチャーが著名なスピーカーや新進気鋭の研究者によって行われていて、大御所の経験談や最新の研究や施策の知見を得ることができました。例えば、2017年 WHO の Director-General に選出された Dr Tedros は卒業生であり、就任直後に来校して記念スピーチを行いました。研究機関としての実績から国内外の組織から絶えず来訪者があるため、その恩恵に浴することができました。

クラスメートは、半数が留学生、多くが20代でしたが、私のような30代から上は50代まで広い年齢層がキャリアアップのために集まっていました。バックグラウンドが大きく異なるため、ディスカッションがメンバーによる各国の紹介になることもありましたが、それも留学生の割合の高い英国の大学院の

良さでしょう。また、入学直後にパーソナルチューターとして担当教員が1名つき、学校生活だけでなくロンドンでの生活も含め様々な内容の相談に乗ってくれました。もちろん、チューターの専門分野や職位、経歴はさまざまで、うまくマッチングしないこともあるようでしたが、私は幸運にも非常に親身となってくれるドイツ人チューターに出会い、論文指導も受けることができました。彼は LSHTM での経験が浅く、英米のアカデミア、とくに LSHTM での expectation や context について外部者としての視点で相談ができて、安心が得られました。彼とは卒業後も家族ぐるみで交流が続いており、今後も研究活動や PhD への進学について相談に乗ってもらつくりです。

余暇の過ごし方

学期中は、週末の1日を勉強にあて、もう1日は家族で外出していました。家族連れに大人気の Natural History Museum, Science Museum, London Transport Museum のほか、市内に多数ある City Farm や公園、時には郊外のアニメ版 Peter Rabbit をモチーフにした Farm にピクニックに出かけていました。時間がなくても夏場は寮の前の公園で夕飯や夕涼み、散歩を楽しんでいました。頻回とはいきませんが、可能な限り家族と一緒に大学の友人たちとのソーシャルも楽しめました。

また、勤務していた頃には考えられなかった長期休暇があり、イングランド南部やパリへ旅行に出かけました。ただ、長男が保育園に楽しく通っていたことから、長期休暇中もできるだけ通園させるようにして、週休2日にするほかは私も学期中の生活リズムを維持することで、学業や就職活動に十分な時間を割くことができました。

現状・今後の展望

2018年春に JPO として WHO のモーリシャス事務所に派遣される見込みで、現在は渡航のための準備をしています。家族の生活もあるため修士論文提出後に日本に一時帰国し、以前に勤務した北海道の山間部にあるへき地医療機関で勤務しながら雪国ライフを楽しんでいます。

先述の通り、留学中に外務省・国際機関人事センターが募集する JPO プログラムに応募し、合格しました。4月に募集が始まり、7月にジュネーブで外務省による試験があり、論文提出直後の9月に合格通知をいただきました。医学部を卒業した時から国連機関、とくに WHO で保健サービスに関わる業務に従事したいと考えてきました。英国留学を契機にキャリアシフトを実現できつつあり、ようやくスタートラインに立つことができるというのが正直な気持ちです。LSHTM の同級生と切磋琢磨しただけでなく、ここに至るまでの様々な方のご縁があって今があると肝に銘じ、初心を忘れることなく、世界の保健サービスの向上のために尽力したいと決意に新たにすところす。

(2016年度 BCJA 奨学生, London School of Hygiene and Tropical Medicine)

2016年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

留学レポート

荒木 啓史

私は、2016年10月からオックスフォード大学社会学科 (Department of Sociology, University of Oxford) の博士課程に留学をしています。BCJA 奨学生として選定いただきましたこと、この場をお借りしてご関係の皆様にご心よりお礼を申し上げます。今回は、現地での研究内容や生活の様子を、少し紹介させていただきます。

■研究紹介

研究テーマは、「教育と経済社会的成果(所得、職業、健康、家族形成、幸福など)の関係性」です(博士論文では、この一部にフォーカスしています)。これは非常にクラシカルなテーマで、膨大な先行研究があり、「教育レベルが高くなれば各種成果も手に入れやすくなる(→だから教育は大切だ)」という見解が半ば定説になっているのではないかと思います。しかし、教育が各種成果に与える影響は、個人や社会の様々な条件によって変わり得るはずで、場合によっては教育が期待されていたような効果をもたらさないばかりか、ネガティブな影響をもたらす可能性も考えられます。そうした多様性・ダイナミズムを捨象して過度に一般化した解釈を自明視してしまうと、アカデミアの発展が損なわれてしまうだけでなく、実務的にも誤ったインプリケーションを導いてしまいかねません。そこで、現在取り組んでいる研究では、個人の教育(学歴や実際のスキルレベル)と各種成果との関係性が、社会の環境(特に教育・スキルの普及状況)によってどのように変わるのか(変わらないのか)を明らかにしたいと考えています。これを通じて、教育の価値(各種成果に対するポジティブ/ネガティブな影響)を再検討するだけでなく、これまで私たちが気づけなかった「社会的なメカニズム」が浮かび上がってくるのではないかと期待しているところです。

■Academic ライフ

皆さんご存知のとおり、こちらの博士課程は、基本的にコースワークがありません(もちろん、自発的に受講することは可能ですが・・・)。そのため、良く言えば自分のペースで研究を進めて博士論文を執筆することができますが、逆に「自分のペース」をきちんと管理できないと、通常のコースワークがあれば積み上げていくことのできる知見やペーパーがないため、路頭に迷ってしまうケースも少なくありません(実際、私と同じコーホートの学生は合計で十数人しかいませんが、そのうち何人かは既にどこで何をしているのか分からない状況に・・・)。この点、幸運にも私の指導教員は面倒見が良く、私が東京大学(学部・修士)在学時にもお世話になった先生

ですので、適時アドバイスを頂きながらこれまでのところ非常に充実した研究生生活を送っています。

指導教員とのコミュニケーション以外では、他の博士課程学生(及び教育担当のファカルティ)と毎週ディスカッションするゼミ、各学科やリサーチセンターで定期的/不定期に開催される各種セミナー・シンポジウム、実用的なスキル(ICT、アカデミック・ライティング、プレゼンテーションスキルなど)を高めるためのトレーニングなどに参加しています。特に、セミナーやシンポジウムには、自身の専門分野以外にも含めて第一線で活躍する研究者や実務者の方々がいらっしゃるため、非常に刺激的で多様な知見・スキルを身につけることができ、オックスフォードが世界的な知の拠点であることを実感する機会となっています。また最近では、Teaching の機会も頂いており、修士学生に対して量的調査・統計の授業(補講)をしたり、研究アドバイスをしたりするほか、近々、学部生に対する Tutorial を担当する予定です。

■College ライフ

オックスフォード大学の特徴の一つは、College(カレッジ)制です。馴染みのある方も多いかと思いますが、学生や教員は特定の学問体系である学部・学科だけでなく、生活・学問共同体的な College(あるいは Permanent Private Hall)にも所属しています。2018年2月現在、合計38の College がありますが、私の所属は Green Templeton College (GTC) です。GTC は、もともと別の組織であった Green College と Templeton College が合併して2008年に誕生したユニークな College で、現時点でオックスフォードの中で最も新しい(歴史が浅い!?) College です。また、graduate-only の College で学部生は所属しておらず、私のように職務経験があり既婚の(子供もいる) mature student も多いため、個人的には非常に快適な居場所になっています。



GTC の Garden と Observatory。Garden は、GTC 誕生前は Green College の所有物で、1980年から約40年間、同じ庭師が手入れし続けています。

College ライフのハイライトは多岐に渡りますが、特に私が楽しんでいるのが「Committee 活動」です。各 College には、狭義には物理的な学生部屋、広義には学生自治組織を意味する Common Room が存在し、その Committee が学生の厚生を高めるために様々な活動(スポーツ・文化イベント、食事・飲み会、研究発表会など)を行っています。GTC では、

20名程度の学生が Committee メンバーとなり、諸活動の企画・運営や College 本体との交渉などを行っています。私もその一員になっています。特に、私の役職は **Couples and Families Representative** というもので、配偶者・パートナーや子供がいる学生の代表として、家族向けイベントなどを主に担っています。その一環として、先日「**Family-friendly Formal Dinner**」というイベントを開催しました。オックスフォードでは、各 College がそれぞれダイニング施設を有しており、定期的に **Formal Dinner** が提供されます。これは文字通りフォーマルな夕食会ですので、基本的に子供が参加することは許されませんが、それでは家族同伴で暮らしている学生が **Formal Dinner** を楽しむのが難しくなってしまいます。そこで、「子供も含めて誰でも参加できる **Formal Dinner** を開催しよう！」ということで **GTC** で実現したのが、小さな子供も参加できる **Family-friendly Formal Dinner** です。当日は、1歳児を含む多くの参加者を得て、ピアノやトランペットのコンサートに始まり、3コースのディナー、そして最後にはクリスマスの時期だったこともありイギリスお得意のミンスパイで締めくくりとなりました。



Family-friendly Formal Dinner. 左はディナー前のミニコンサート、右はディナー時の様子。

その他、**GTC** ではスポーツ・文化活動やソーシャル活動も盛んです。私も、**GTC** のサッカーチーム、タッチラグビーチーム、卓球チームに参加しているほか、毎週日曜日に **College** 内のジムで開催されるヨガクラス、年に数回開催されるミニコンサートなども楽しんでいきます (**GTC** には、お抱えの日本人ピアニストがいらっしゃる、素晴らしい演奏を定期的に聴くことができ非常にラッキーです)。また、他の学生と一緒にカジュアルな食事会やパーティーを開催することもしばしばあります。私自身も、留学期間中に「埼玉親善大使」を埼玉県から委嘱いただいていることもあり、年明けにお雑煮と埼玉県産の日本酒を振る舞いました。(ただ、お餅と日本酒は、初めて口にする欧米の学生には少しハードルが高かったようで、念のため同時に準備していた日本版カレーライスの方が圧倒的に人気でした…)



GTC の仲間と。左はハウスメイトに日本食&お酒をふるまった時の様子、右はサッカーチームの集合写真(このあと敗けてしまいました…)。

■その他(日常生活+α)

留学開始から最初の半年間は単身生活をしていましたが、その後、妻と子供2人が渡英し、家族4人での生活が始まりました。子供たちを通じて見えてくる英国の様子は、単身時には気づけなかったことばかりで、とても新鮮です。特に、子供たちは地元の小学校に通っており、現地の先生や多国籍の保護者・子供たちと接する機会も多いのですが、日本の小学校(制度や文化)が念頭にあった妻や私にとっては、驚く(呆れる? 笑うしかない?)ようなことがたくさんあり、私が専攻する比較教育社会学の観点からも非常に学び多い経験となっています。紙幅の都合もございまして、詳細は割愛させていただきますが、また機会がございましたらご報告させていただきます。

改めまして、上記のような非常に貴重な機会を後押ししていただき、深謝申し上げます。留学生活も(恐らく)既に折り返し地点を過ぎているところですが、引き続き文武+αに全力で取り組んでいきたいと思っております。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

(2016年 **BCJA** 奨学生: University of Oxford)

2016年度 **BCJA** 英国留学奨学金授与者からの近況報告

留学レポート

柳田 絢加

私は2015年5月よりケンブリッジ大学の **Stem Cell Institute** にて、発生生物・幹細胞生物学の研究を行っております。**BCJA** 奨学金応募時は研究を継続する為の奨学金、研究費の獲得に苦勞しており、非常に辛い時期でした。**BCJA** 奨学生に認めて頂いた事は留学中の大きな励みとなっただけではなく、日本学術振興会の海外留学研究員やケンブリッジ大学 **Lucy Cavendish college** の **Research Associate** の採用にも繋がり、研究生活により専念できるようになりました。この場をお借りして **BCJA** の皆様に厚く御礼申し上げます。

ケンブリッジでの研究

クローン技術、**ES** 細胞(着床前の胚盤胞期の胚より作られる幹細胞)の発見に代表されるように、ケンブリッジ大学ではこれまで優れた発生学・幹細胞学研究がなされてきました。現在も世界中から優秀な研究者が集まり、生殖細胞から各臓器に至るまで様々な組織を対象に、体ができる仕組みを研究する基礎研究、幹細胞を用いた疾患の原因解明と治療法の開発を目指す臨床研究の両方が行われています。

私は、着床前の胚盤胞を構成する細胞が胚の中で、適切なタイミングで、適切な細胞に成長し(分化し)、適切な場所へ移動する仕組みについて研究しています。胚発生の仕組みを解明することは、繁殖率の向上のみならず、幹細胞の

培養条件改善にもつながります。現在、論文として成果を発表できるまでもう一歩という段階になりました。2018 年も引き続き研究に邁進していきたいと思えます。

研究所での驚き

大学院まで日本で過ごした私にとって、イギリスでの研究生活は新鮮で刺激的な経験になっています。

研究所に来て、まず驚いたのは女性研究者の多さでした。研究所の約半数の研究グループリーダー、研究員、学生が女性です。女性研究者が妊娠、出産し、職場に復帰する過程や男性研究者が数週~数ヶ月間の育児休暇を取得する様子は新鮮でした。夕方のセミナーを幼稚園のお迎えに間に合う時間、あるいはお迎え後に参加できる時間にするかの投票メールが学内で回ってきたこともありました。また、様々なキャリア段階の女性研究者が、身近に数多くいることで、キャリアやライフプランに関する相談がしやすくなり、アドバイスをもらう機会が得られるようになりました。多くの女性研究者がいることで、性格や人生プラン、環境の違いを考慮したモデルやアドバイスが得られ、助かっています。

また、ご高齢の現役研究者を見かける機会が多いことにも驚きました。70 代、80 代の研究者がセミナーで最前列から鋭い質問を投げかける姿、若い研究者と同様に自ら実験をする姿は、まさに生涯現役。長きに渡り、最先端を走っている大先輩研究者の凄さと、誰にでもサイエンスを楽しむ機会を与え、それを守るケンブリッジ大学の温かさを感じました。

文化の違い

イギリスでは、日本と異なり、ヒト受精卵を用いた研究が可能で、提供された胚を用い、ヒト iPS 細胞よりもさらに着床前の胚に近い性質を持った幹細胞の樹立や、ヒト受精卵に顕微鏡下で遺伝子操作を施す研究が行われています。ネズミやサルを用いた研究での知見が必ずしもヒトにも当てはまる訳ではない事がわかってきました。ヒト胚・幹細胞を使い、他の動物との共通点、異なる点を明らかにすることは、医学、生物学、進化学など、様々な分野の発展につながるでしょう。ヒト胚の使用や動物実験の規制は、宗教や文化によるところもあり、ヨーロッパ内でも国により厳しさが異なります。サイエンスが文化と深く結びついていること実感する日々です。

私が所属する研究所では研究室間に壁がなく、幹細胞に関係する 10 研究室が一つの建物内で、機器や試薬を共有し研究しています。研究室の垣根を越えて研究の話を気軽にでき、研究の幅とスピードが広がりました。

世界各国から研究者が集まっているため、所内では様々な文化に触れることとなります。予約制で使う共通機器の使用や共同作業の際、毎回遅れてくる様子すら見えない人、時間きっかりに始まり、きっかりに終わる人、時間 10 分前には来てしまう人と様々です。個人の性格によるところもありますが、文化の違いを感じ面白いです。大抵の日本人が早めに来るのは何故かと質問されて初めてそれが常識ではないことに気がつきました。ある研究員が「時間があつたらお願い

できますか?」と別の国出身の研究員に頼んだところ、言葉通りに受け取られ、早急にやってもらえなかったと嘆いていたこともありました。出身地により、「good」が本当に good を意味していないこともあれば、「not bad」がかなり good 側を意味していることもあります。グローバル化というのは、英語が話せるようになるだけでは、様々な文化や慣習を知ること大切だと感じています。



(写真) 研究所全体での研究発表会。Newmarket にて。

教育活動

秋から学生の授業に携わる機会に恵まれました。ケンブリッジ大学では授業が 1 学期 8 週間の 3 学期制。主な学部は 3 年制(一部の学部は 4 年制、医・獣医は 6 年制)。日本に比べて授業期間も年数も短い為、授業の進捗や密度が極めて早く、濃いです。私が日本で獣医学科を卒業したことから、獣医解剖学と獣医組織学の実習を担当しています。実際の動物や組織切片に加え、電子データやホルマリン標本、模型等を使用して、一回の実習が 2 時間で終わるように効率の良い実習が計画されています。実習準備は専門の職員が行ってくれる為、教員は実習の開始時間に実習室へ行き、終了と同時に実習室を出られることに最初は驚きました。実習では、現役の教員に加え、退官した教授が指導に来ることもあります。実習に優秀な教員が複数人いることで、生徒により目が行き届くようになり、生徒も一人の先生の手が空くのを待たずに質問ができるのはよいことだと思いました。私は英国へ留学するまで、海外の学校に在籍したことも、日本での教育歴もなかった為、様々な教育システムに触れる貴重な機会として、今後も大切にしたいと思えます。

課外活動

ケンブリッジ大学の Olympic Gymnastics Club (器械体操部)に所属し、学生達と一緒に練習しています。日本で取り組んでいた競技を継続する機会に恵まれ、研究活動の良い息抜きになっています。学生との交流を通して、ケンブリッジ大学の学生生活、様々な学部の話を知ることができ刺激にもなっています。10 代や 20 代前半の若い学生と比べると、体力面では劣りますが、練習の合間に進路相談を受けることもあり、少しは役に立っているかと思えます。



(写真)ケンブリッジ大学とオックスフォード大学の対抗試合。オックスフォードにて。ケンブリッジ大は男女アベック優勝。

ケンブリッジでの出会い

ケンブリッジには、「ケンブリッジ日本人会」と「十色会」という2つの日本人コミュニティーがあります。前者は、職業年齢問わず、ケンブリッジに暮らす人の集まり。後者は、大学に在籍する学生、ポスドクの集まりです。どちらも月1回メンバーの1人が、研究・仕事内容を発表する会合があります。様々な年齢の方との交流、文系の研究者、企業・政府で働く方のお話はどれも興味深く、視野を広げるのに役立っています。留学したことで、今まで自分が交流していたコミュニティーとは全く異なる日本の方々と出会えたことは思わぬ留学の副産物でした。

これからもより一層研究に精進し、世界を舞台に活躍できるように人材となれるよう努力致します。また、研究や留学経験を活かして、日本、世界がより良いものになるように貢献していきたいです。

(2016年度 BCJA 奨学生, University of Cambridge)

2017 年度 BCJA 会計決算報告書 (2016.11.1～2017. 10.31)

(一般の部)

収入の部

科 目	金 額
前年度繰越金	△360,500 円
年会費@2,000	172,000 円
合 計	△188,500 円

支出の部

科 目	金 額
ニューズレター	41,580 円
発送費	58,906 円
封筒代	11,217 円
アルバイト	60,000 円
文具	16,560 円
Web 更新費	28,166 円
振込手数料	9,020 円
合 計	225,449 円

2017 年 10 月 31 日現在の資産状況

次期繰越 (a)	△413,949 円
----------	------------

(BCJA 奨学基金の部)

収入の部

科 目	金 額
前年度繰越金	753,661 円
寄付金	649,000 円
合 計 (b)	1,402,661 円

支出の部

科 目	金 額
奨学金@150,000×5人	750,000 円
振込手数料	2,160 円
小計 (c)	752,160 円

2017 年 10 月 31 日現在の資産状況

次期繰越 (a+(b-c))	650,501 円
----------------	-----------

2018 年度 BCJA 奨学基金趣意書

2018 年 1 月 31 日

BCJA 会長 青柳昌宏

BCJA 奨学基金は、2000 年より BCJA 会員の有志の皆さまからの寄付金を基盤として、英国留学生の支援活動を着

実に進めてきております。昨年度は、5名の留学希望者に対して、奨学金を授与することができました。

今年度も奨学生の募集を行いますので、奨学基金へのご寄付をお願い申し上げます。

記

一口 5,000円 二口以上でお願い申し上げます。同封の郵便振込用紙に、振込額、住所、氏名をご記入の上、下記口座宛にお近くの郵便局でお手続きいただければ幸いです。

ご寄附頂きました方々への領収書等の発行は特に致しておりませんが、必要であればご連絡、或いはご寄附の際に振込用紙にその旨、ご記載下さいますようお願い申し上げます。

尚、御礼状に関してはNewsletterにて代えさせていただきますことを御理解下さい。

口座記号番号:00180-0-426794

加入者名:BCJA 奨学基金

事務局 島津幸男

〒745-0004 山口県周南市毛利町 3-37-1-612

連絡先 Tel:090-8773-1024 Fax:0834-32-4030

e-mail: shimazu@herb.ocn.ne.jp

BCJAの銀行口座のお知らせ

金融機関名: ゆうちょ銀行

金融機関コード:9900

店番: 019

店名:0一九店(ゼロイチキュー店)

科目: 当座

口座番号: 0426794

受取人名: BCJA ショウガクキキキ

要注意!

総会参加費等、BCJA への振込時、ネットバンキングをご利用の会員の皆様には、次の点をご注意下さい。

振込先: ビーシージェイエー(BCJA)

2017年度BCJA奨学基金協賛者一覧

2017年10月現在

協賛者総数	59名	総額	649,000円
派遣者数	5名	奨学金総額	750,000円

協賛者氏名 (敬称略 順不同):

安原義仁	山口勝己	池上忠弘
安藤鄭之	山口泰夫	池田 修
塩田 洋	山田昭廣	竹内百合子
横山俊夫	出来尾 格	中山修一
岡井清士	小倉暢之	中川威雄
岡村定矩	小鍛治 繁	町並睦生
岡田博有	植木研介	長澤 泰
加藤久雄	諏訪部 仁	塚原重雄
河越正明	須田英明	塚本 泰
河本直紀	水田 洋	島津幸男
茅野秀一	杉浦和朗	南方 暁
関谷 透	菅井直介	難波光義
玉井俊紀	西山一郎	梅川正美
荒木 喬	西田宏子	白鳥 令
高須俊明	青柳昌宏	本吉邦夫
高石啓一	石井丈夫	野城真理
高柳和夫	川本 敏	矢口 宏
斎藤 勉	草間芳樹	梶 瑞希子
山下 博	太田隆英	齋藤友博
山下純宏	滝沢英夫	

注記: 振込票でお名前が不鮮明であった方については、申し訳ございませんが、苗字のみ標記いたしております。

BCJA ホームページについて

ホームページ担当

BCJAのホームページ<http://www.bcja.net/>では、過去のニューズレター閲覧、BCJA 英国留学奨学金、BCJA 活動状況、メンバー向け案内などがご覧になれます。幅広く有益な情報を提供できるサイトにするため、どうぞ皆さまからのご意見、ご希望をお寄せ下さい。

Googleグループ[bcja]のご利用案内

Googleグループ担当

BCJA 会員の情報交換、情報伝達などに活用していただくために、Googleグループの中にBCJA 会員専用グループとして、[bcja]グループを新規に設定いたしました。これまでのYahooグループのメンバーの方は、登録内容を移行しております。登録を希望される方は、Googleへ登録後に下記のURLにアクセスして下さい。

<https://groups.google.com/forum/?hl=ja#!forum/bcja-member>

または、masa_aoyagi5@yahoo.co.jp までメールでご連絡をお願いいたします。

[編集後記]

青柳会長より後を受けて、27号より編集を担当させていただいております。今年も出版が大幅に遅くなりまして大変申し訳ございません。昨年度は、初の図書の出版(『格差社会と労働市場』(共著, 慶応義塾大学出版会)をいたしました。留学からの研究がようやく形になったことが嬉しく思うと同時に、これも BCJA の皆様方からのお陰様と心より感謝申し上げます。

本レターへの投稿を幅広く募集しております。皆様の留学体験談、研究・事業活動のご紹介、英国との交流事例、最新の英国事情など、英国と日本の交流に関する内容について、よろしくご投稿をお願いいたします。既に原稿をお送りいただき、掲載されました方々にも、続報の投稿をぜひよろしくお願いいたします。また、特集テーマ、原稿依頼先の案、紙面構成、編集方針などのご意見も積極的にお寄せいただければ幸いです。

なお、本レター発送については、いつも会計担当の島津様にご協力いただいております。この場を借りて、心より感謝いたします。

(石井加代子、2003年度 BCJA 奨学生, London School of Economics, 2003-2004)

ishiikayoko@hotmail.com

